

大学昇格100周年と京都府立医科大学雑誌

新年あけましておめでとうございます。2022年も、どうぞよろしくお願ひいたします。

さて本年は1872年創立の本学にとりまして創立150周年という記念の年に当たります。つきましては創立記念日である11月1日前後にたくさんの記念イベントが予定されています。案内は様々な媒体で届くと思われまますので、学友の皆様にはぜひ奮ってご参加をお願いいたします。

実はその前年である昨2021年は本学にとりましてもう一つの重要な記念の年でした。本学が大学昇格を果たした1921（大正10）年からちょうど100周年の記念の年を迎えたのでした。これを記念して昨年2021年10月23日に本学図書館ホールで記念式典が行われ、記念誌の発行なども行われました。つきましては、昇格のいきさつと記念式典の様子を本誌誌上でも以下に簡潔に紹介したいと思います。また、本誌の創刊も大学昇格と深い関係があります。この機会に、いくつか文献を渉猟して簡潔に記したいと思います。

大学昇格のいきさつ

本学は1872（明治5）年に京都療病院として創立され、同時に医学生たちへの教育が行われたのがその源流であると伝わります。療病院設立には、多くの市井の方々からのご寄付に助けられたり、外国人医師の招聘に多額の資産を必要としたりなど、大きな困難が多数あったことは学友の皆様はよくご存じのことと思います。そこから始まる本学の150年にわたる長い歴史の中では、ご存じの通り、その後も大きな困難がいくつも立ちはだかることになります。このなかで1921（大正10）年に達成した「大学昇格」は間違いなくもっとも困難でありかつ今日への影響が最も大きいイベントであったといえます。

大正初期のころまでわが国で医師となるためには複数の道筋がありました。すなわち、大学医学部を卒業する道、医学専門学校を卒業する

道、そして各種学校を卒業して医術開業試験に合格するといった3つの道筋になります。こうした背景の中、医療レベル維持を目的として、大学が主体となる教育システムへと一元化されることとなりました。当時医学専門学校であった本学は、このため、極論すれば、大学昇格しなければ医学教育機関として存続できないということになったわけです。京都ではわが国2校目となる帝国大学医科大学がその少し前に開学していたこともあり、また、国家ではなく一地方自治体が大学という高等教育機関を維持しつづけることができるのか否か、といった不確定要素が人心をかく乱する中、「大学令」が1919（大正9）年に発布され、単科大学や自治体立大学にも昇格の道筋が作られました。この流れに後押しされるように当時の本学学生・同窓生たちが立ち上がって昇格に向けた活動を展開したと伝わります。当時、大阪府立医学専門学校や愛知県立医学専門学校がそれぞれ1919年と1920年にいちやく大学昇格を果たしたことも本学関係者に大きな影響を与えたに違いありません。

声を挙げた学生たちの勢いに推されるかのように、当時の小川瑛五郎校長を中心として教員たちが動いたと伝わります。多くの困難ありましたが、同窓生たちからの寄付によって予科（後の教養課程）学舎建設のための花園の地を購入するなどの固い決意と行動力をもって知事・



図1 式典会場前の案内板

議会・地域の方々からの支持をとりつけ、1921年10月19日、晴れて、文部大臣名で大学昇格が認可されました。翌日の1921年10月20日付の官報で報じられています。

1921年の11月1日（本学の創立記念日）に大学創立50周年と合わせ（当時は「数え年」で創立記念を行っていたため1922年ではなく1921年に行ったと伝わります）大規模な大学昇格祝賀会が開かれたと伝わります。「百年史」によると夜には職員・生徒の提灯行列が、「校門→御所建礼門（万歳三唱）→堺町御門→丸太町→寺町→二条→北上して帰学」のコースで行われたという記述があります。京都ホテルに居た小川校長らはこのときバルコニーに出て行列に応えたようです。昇格は大いなる喜びであったに違いありません。一方で、「百年史」には小川学長が「第三者からみても、学術研究の点で大学に値する状態にしなければならない」と学生・学友に説いたと記述されています。また、地元新聞の

インタビューに答えて「高い手腕の医師の養成」を約束しています。小川学長は昇格の喜びだけではなく、「大学とはどのような存在であるべきか」という問いに身の引き締まる責務を感じていた様子がひしひしと伝わります。

昇格の経緯は次段に記載した通り、八木先生の記念講演と記念誌論文「大学昇格への道」に詳しく解説されていますので、ぜひご一読をお願いします。

大学昇格100周年記念式典と 記念誌の発行

100年前の大学昇格にかけた先人たちの努力と決意を思い起こす機会として、2021年10月23日に本学の図書館ホールにて大学昇格100周年記念式典を行いました（図1）。新型コロナウイルス感染防護の観点から、学内の感染防護有識者の先生方の指導に基づいて100名を上限とする人数で、十全な感染防護措置を施したうえで、



図2 開会の式辞を述べる竹中学長



図3 西脇知事祝辞



図4 会場の様子（井端学友会長挨拶）



図5 夜久創立150周年記念事業委員長挨拶

来賓・司会者・教職員・学生に参加いただき、安全に開催することができました。高解像度画像でのオンライン中継も併用され、一般の聴衆の方はそちらで参加いただいたと思います。式典は竹中学長の式辞ではじまり(図2)、西脇知事(図3)、金田理事長の祝辞、そして井端学友会長(加藤副委員長代読)(図4)、夜久大学創立150周年記念式典委員長(図5)、そして奥田大学昇格100周年記念式典委員長からの挨拶(図6)のあと、本学医史学の八木聖弥先生による記念講演「大学昇格への道」が行われました(図7)。この講演は八木先生が新規に発見された膨大な資料にもとづいて本学の大学昇格の詳細を解説され、今回の式典の目的・趣旨にふさわしく、大変聴きごたえのある内容でした。その後、関係者による座談会と学歌ムービー上映に次いで、医学科と看護学科代表学生による力強い「誓いの言葉」の宣誓(図8)をもってお開きとなりました。

大学ホームページにこの式典の様子が掲載さ

れています。式典での多くの挨拶や記念講演の様子は動画で視聴できるようになっていますので是非ご高覧ください。

また、この式典に際して「大学昇格100周年記念誌」を発行しました(図9)。100ページ余りの小冊子ですが、八木先生による論文「大学昇格への道」をはじめ歴史的写真や関連するエピソード記事を多数収載しています。学生諸君・学友の皆様のお手元にはすでに届いているものと思いますが、ぜひ手に取っていただければ嬉しく思います。なおこの冊子の内容も大学ホームページ(<http://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/univ100.html>)で全頁の閲覧ができるようになっています。

ご参加いただいた皆様、そしてご援助・ご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。

京都府立医科大学雑誌と大学昇格

当然ながら本誌の創刊は大学昇格と深く関



図6 奥田大学昇格100周年記念事業委員長挨拶



図7 八木聖弥先生による記念講演「大学昇格への道」

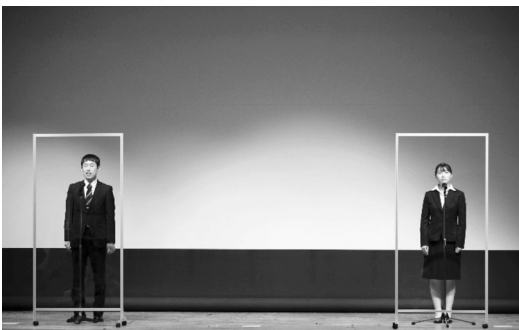


図8 医学科代表学生と看護学科代表学生による「誓いの言葉」

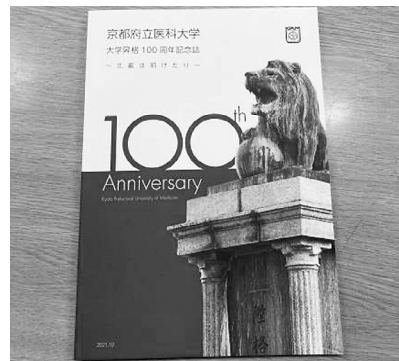


図9 大学昇格100周年記念誌の表紙

わっています。本学では、創立以来、数多くの学術雑誌や広報誌や文芸活動出版物が発行されてきました。その経緯や消長については本誌の歴代の編集委員長の記事に散見することができます。1991年の本誌第100巻記念号に森本武利委員長（当時第一生理学教室教授）がこうした経緯を詳述されていますので、それを拾い読んでみたいと思います。

1896（明治29）年に本学（の前身の医学校）の卒業生たちの組織である「校友会」が結成され、翌1897（明治30）年に本誌の前身である京都府立医学校校友会雑誌が創刊されました。当初は学術論文だけではなく、広報や生徒たちの文芸作品なども掲載する「総合誌」だったようです。大学昇格と関連のある点として、たとえば、「大正8年（1919年）には大学昇格問題が起こり、3月13日および同7月13日に校友会雑誌の号外を発行し、募金活動を行い、大正10年（1921年）には第3号を発行してその経過を報告している」と記述されています。少し長くなりますが森本先生の文章の引用を続けると「大正10年（1919年）10月19日には京都府立医科大学の設立が認可され、校友会雑誌の第91号（大正11年〔1922年〕4月発行）は創立50周年、昇格記念号となっている」とあります。つづけて「大正12年（1923年）5月には学位授与権が承認されている。これに先立って1月に学内に学術集談会が発足し、京都府立医科大学学友会雑誌（筆者註 短期間、この雑誌はこの名称で呼ばれた）の第93号（大正12年4月20日発行）は学術集談会八回記念号である。次いで第94号（大正12年9月10日発行）から雑誌のタイトルを京都府立医科大学雑誌に改題した」と森本先生は続け、大学昇格に際し、当誌が果たした役割を描写しています。その後この雑誌は、主として学位論文発表の場として活用されることになり、完全な医学学術雑誌となります。そのため、このころ、学生を中心とした記事等は本誌では掲載しなくなったとのことです。

さて、前段で、大学昇格時に功績のあった当時の医学校校長小川瑳五郎について触れました。小川校長（昇格後は初代学長兼病院長兼内科教

授だったとのこと）は本誌の創設にも尽力していたことが森本編集長の記述にあります。曰く「小川瑳五郎が大正15年（1926年）8月に退職して兵庫県立神戸病院に赴任したが、このときに本学に奨学資金を寄付したとある。大学ではこの資金を基に京都府立医科大学雑誌を、総説、原著、抄録、会報からなる純学術誌として発足させた。そしてこの第1巻第1号を小川前学長の退職記念号としている」とのことです。小川校長のエピソードや本学の学位授与権獲得については「大学昇格100周年記念誌」にいくつか記事がありますので、ぜひそちらも併せて参照していただきたいと思います。

ま と め

本稿では昨年行われました大学昇格100周年事業について簡単に紹介しました。昇格記念式の模様や記念誌の内容は大学ホームページで公開していますのでこの機にぜひご覧いただければと思います。そして、今年はいよいよ創立150周年の記念の年に当たります。ご参加をよろしくお願いいたします。本誌は大学昇格や学位授与権獲得と非常に密接に関係している学術出版物です。近年、学位論文発表の場としての機能は大幅に縮小してきていますが、今後はひきつづき学術論文発表の場、そして大学関係者間の医学・科学コミュニケーションの場としての機能を拡充させてゆきたいと考えます。皆様には今後ともどうぞよろしく本誌へのご支援・ご協力をいただきますようお願いを申し上げます。

文 献

- 1) 京都府立医科大学百年史。京都府立医科大学百年史編集委員会。1974年3月20日発行。
- 2) 京都府立医科大学 大学昇格100周年記念誌 ～比叡は開けたり～。京都府立医科大学 大学昇格100周年記念事業委員会。2021年10月23日発行。
- 3) 京都府立医科大学雑誌の歩み。森本武利、奥村美津子、上野頼昭。京都府立医科大学雑誌 100(10): 937-952, 1991.
- 4) 通刊1000号の発行に関して。高松哲郎。京都府立医科大学雑誌 117(9): 669-671, 2008.

（2022年1月1日 奥田司 記）